# 肉質にこだわった和牛肥育
# ～鳳来牛、みかわ牛のブランド化に向けて～

**新城市　　久保田 和男 さん（農事組合法人 源氏肥育組合）**
**畜産（肉牛）**
**【平成 25 年３月 15 日掲載】**

新城市で後継者と共に、和牛一貫経営を大規模に行なっている久保田和男さんを紹介します。久保田さんは、肉質にこだわり、長年、自家配合飼料による肥育に取り組んできました。今年度、愛知県の代表として参加した全国和牛能力共進会においてもその肉質の高さが評価され、優等賞を獲得しています。

## 肥育・繁殖一貫経営の開始

和牛肥育農家の長男として育った和男さんは、農業技術大学校（現 愛知県農業大学校）を卒業後、海外派遣農業研修制度を利用し、アメリカに渡ります。研修先はフィードロット方式を取り入れた数万頭規模の肥育農家で、一頭一頭に目を配る日本の生産方式とのあまりの違いにショックを受けたそうです。一方、大規模経営に触れたことで、牛一頭を育てるのにかかる経費を見つめ直す良いきっかけにはなったそうです。

源氏肥育組合の久保田和男さん（右）、
尚子さん（中）、後継者の剛司さん（左）

帰国後の昭和 55 年、父の起こした(農)源氏肥育組合に就農した和男さんは、経営に占める素牛導入経費の割合が高いことに着目し、自家繁殖を考え始めます。当時は、素牛価格が高騰していたのに加え、近隣地域における繁殖農家の高齢化が進んでいたことから、今後、安定的に素牛を確保することが困難になるのではないかとの懸念もあったため肥育・繁殖一貫経営の開始を決意します。

## 試行錯誤の連続

現在でこそ、和牛における一貫経営は一般的になりつつありますが、当時はまだ珍しく、技術的にも確立されていませんでした。特に一貫経営開始の初年度は、生まれた子牛の多くが産後間もなく死んでしまい、原因もわからず、毎日牛舎の消毒を行なうなど苦労の連続だったそうです。

生後間もない子牛

担当の獣医師からも「繁殖はあきらめたほうがいい。」と言われたそうですが、逆にこの一言で発奮し、母牛の餌から見直し、子牛の生存率の向上を図ります。現在では、人工乳の改良も進んだことで生存率は飛躍的に向上したそうです。また、ＥＴ（受精卵移植）技術にも、普及当初より積極的に取り組み、地域の酪農家の協力を得ながら繁殖を軌道に乗せたそうです。

## 後継者の就農

万歩計を用いて発情期の
タイミングを計る

現在、繁殖部門は、後継者の剛司さんが担当しています。交配の組み合わせから、タイミング、妊娠牛の管理を一手に引き受けています。繁殖において懸案事項であった交配のタイミングに関しても、万歩計を用いて発情期を把握するシステムを導入し、解決したそうです。

親子の関係について剛司さんに尋ねると、「経験では親父にはかなわない。まだまだ勉強中です。」と控えめに語ってくれました。逆に、「牛一頭にかかる経費の把握、相場を読む力など経営に関してはまだまだ。」と辛口の和男さんですが、繁殖部門を完全に任せていることからも剛司さんへの信頼の高さが伺われます。また、「後継者がいなければ、規模の縮小も考える歳だが、(剛司さんのおかげで) 気持ちが若くいられる。」と語るように、剛司さんの就農後、当牧場では 100 頭近く飼養頭数が増加し、「攻め」の経営を展開しています。

## 鳳来牛、みかわ牛のブランド化に向けて

和牛の流通は、この四半世紀で生体販売から枝肉販売に大きくシフトしました。枝肉販売では、肉質が大きな評価基準となっており、その等級が経営を大きく左右します。そのため和男さんも、脂肪交雑の向上のため、飼料の自家配合にこだわり、日々改良を重ねてきました。そうした努力もあり、今年度、愛知県の代表として参加した全国和牛能力共進会において優等賞 13 席を獲得し、全国的にも高い評価を受けました。さらに、最近では、脂肪交雑だけでなく「うま味」の指標となるオレイン酸の含有量も独自に調査し、飼料の改良を重ねています。

また、和男さんは地域全体の和牛生産振興にも力を入れており、特に「鳳来牛」については、30 年ほど前から近隣の肥育農家と協力して、地域の農林水産祭等での消費宣伝活動を行ってきました。「鳳来牛」の肉質と和男さんたちの熱意が地域にも理解され、平成 6 年には「鳳来牛」を専門に扱うステーキハウス「こんたく長篠」がオープンします。現在は、活躍の場を県全体に広げ、県下統一ブランド「みかわ牛」の発展にも尽力されています。

耕種農家への堆肥販売（左上）
試験導入中の稲ＷＣＳ（左下）
地元生産者から収集した稲わら（右）

## 耕畜連携で両得を目指す

最後に今後の目標についてお聞きしたところ、「地域の農業全体が儲かる仕組みを構築したい。」と語ってくれました。現在、行なっている稲わら、稲や牧草のＷＣＳ（ホールクロップサイレージ）と堆肥の交換はもちろんのこと、試験的に導入している稲ＳＧＳ（ソフトグレインサイレージ）についても、耕種農家と連携を図りながら利用拡大を図っていきたいとのことでした。

執　　筆：農業経営課
取材協力：新城設楽農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2013, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.